

## 12月恒例のセリ会報告他

セリ会は様々な出品物 84 点があがり、50 数名の参加を持って楽しく行われた。

総売上 ¥184600 となり、そのうち 20% が会に寄付納入となりました。ご参加の皆様、進行スタッフの皆様ありがとうございました。

なお、皆様の希望が多いので 6 月のセリ会も継続の方針で調整することとなりました。ご協力も含めまして何卒よろしくご了承方お願い申し上げます。

昨年はクロマダラソテツシジミが関東でも広く発生し大賑わいとなりましたが、中国地方や近畿地方ではルリウラナシジミの発生も確認され、静岡県のサツマシジミや大阪府のカバマダラも継続発生しました。南の蝶がどんどん北上しております。今年は関東地方に何がくるかの予測もつきません。クマソの継続発生はあるのかも含めまして注意して見守る必要があるかと思えます。

1/15 関東地方の農家でモンシロチョウの羽化が確認されたとの話を聞きました。これも相当早い発生ですよ。ここ 2~3 日は寒いですが全体として暖冬気配ですのでどうなりましょうか？

昨年 12/29 に足慣らしを含めて高尾山に行ってきました。高尾博物館の跡地はきれいに整地されなにか新しいものができるようです。博物館があった当時は裏庭でミスジの幼虫が見られ、松田先生のウラギンシジミの越冬状態観察のもととなったよいツバキの木がありましたが、皆なくなりさびしいものとなりました。なお付近のモミジをかなり見ましたがミスジは発見できませんでした。

山頂付近のブナを調査しましたが、フジは 3 卵しか確認できませんでした。高尾のフジは 10~15 年周期で大発生することが知る人ぞ知るの定説？となっております。前は 5 年前に大発生があり、すぐ 2~300 卵確認できたとのことですので、5 年後か 10 年後にはまた大発生があるかと思えます。

下りながらキジョランを見て歩きました、食痕の穴あきはたくさんありましたが幼虫は皆無でした。

もう皆蛹になったとするには一寸早いと思いますが、幼虫の見当たらない原因はつかめません。

暮れも押し迫っているのにハイカーの多いこと多いことにびっくりしました。日本人もそんなにあくせくせず余裕があるのか、風流な人が増えたのか、はたまた暮れの雑用から逃げ出しているのかはわかりませんが並みの数ではありませんでした。

\* 2010 年度の会費徴収の時期となりました。3 月末日までの納入にご協力方宜しくお願い申し上げます。一応仮会員の形で 6 月末日まで猶予期間を設けてありますが、未納の方は 7/1 付けで認定退会となりますので宜しくご承知おきください。

### \* 住所変更

田根 徹 〒572-0004 大阪府寝屋川市成田町 24-15 T: 072-833-0411 HT: 080-6611-7807

なお、コンスダースラットさんも同上の住所となります。

石 雅和 〒913-0052 福井県坂井市三国町運動公園 1-4-85 T.F: 0776-97-6122

- \* 会誌 NO.54 が出来上がりました。1 月例会で配布、以降の発送となります。宜しくご承知おきください。
- \* 7 月例会は会場の都合により 7/27 (第 4 火曜日) となります。お間違いなきよう宜しくお願い申し上げます。
- \* 新聞紙上より

## 暗闇50年 ハエ「進化」

シヨウジョウバエを50年以上、約1400世代にわたって真っ暗な中で飼育し続けていると、姿や生殖行動などに変化が起きることが、京都大の研究でわかった。生物の進化の謎を実験によって解き明かす初の成果として注目を集めた。横浜市で開かれる日本分子生物学会で9日発表する。

09.12.8 (金) 読(9)

### 1400世代、嗅覚の毛伸び生殖にも影響

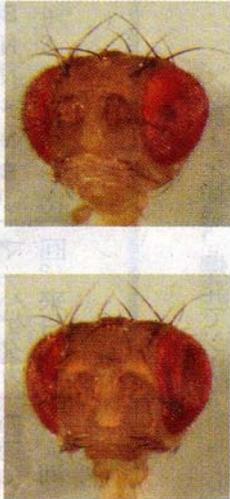
1954年、理学部動物学教室の森主一教授(2007年2月死去)が、暗室でハエの飼育を開始。以来、歴代の教員や学生らが、遺伝学の実験用に代々育ててきた。

暗室のハエは、においを感じる全身の感覚毛が約10%伸びて、嗅覚が発達。互いをフェロモンの違いで察知して繁殖し、通常のハエ

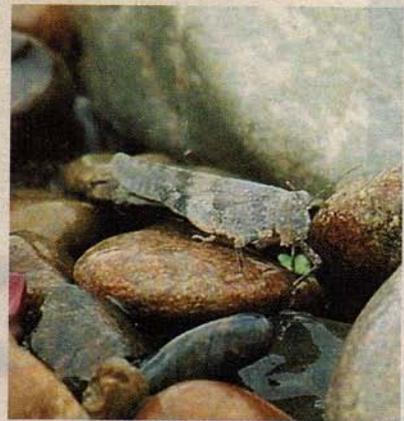
とは一緒に飼ってもほとんど交尾しなくなっていた。全遺伝情報を解読した結果、嗅覚やフェロモンに関する遺伝子など、約40万か所、京都大が研究でDNA配列の変異が見つかった。視覚にかかわる遺伝子の一部も変異していたが、光には敏感に反応するので視覚はあるらしい。シヨウジョウバエ

の寿命は約50日。1400世代は、人間なら3万5400年に相当するという。阿形清和・京大教授は「通常とは異なる環境で世代を重ねることで、まず嗅覚などの感覚器官に差が生まれ、それが生殖行動に影響し、やがて種の分化につながっていくと推測できる」と話している。

50年以上、暗室で飼育したシヨウジョウバエ(上)。普通に飼育したもの(下)に比べて全身に生えている感覚毛が約1割長く、頭部では左右の毛が交差している



## 多摩川からの便り



石のような体色が周囲に溶け込み、外敵の目を欺く（24日、狛江市駒井町近くの河川敷で）

### 砂利の周り ひっそりと

2019.7.28 読

#### ⑦ カワラバッタ

全国的に姿を消しており、東京など約20都府県で絶滅危惧種に指定されているカワラバッタ。草木も生えないような砂利だらけの

河原を好んでひっそりと暮らすこのバッタの目撃が、多摩川で相次いでいる。灰色がかかった体の特徴で、7月頃に羽化する。真夏に石の下などに卵を産み、秋口に生涯を閉じる。

数を減らした最大の原因は、河原の減少。河川改修が進んで洪水が減り、河川敷にどんどん草花が生い茂るようになったからだ。そんな彼らをNPO法人「多摩川塾」のメンバーは先月末から、多摩、稲城、狛江の3市で目撃。狛江市の河川敷では、数歩歩けば、驚いたカワラバッタが飛び上がって、目の前を横切る姿が何度も見られた。国交省は1965年、多摩川の砂利採取を全面禁止。2001年からは、中流域を中心に、高木を伐採し、砂利を敷き詰めるなど河原の再生に取り組んでいる。施策が奏功したかは不明

だが、カワラバッタは日本の固有種。「彼らの暮らしやすい環境が出来つつあるのなら、多摩川が本来の姿を取り戻してきたと言える」。同塾の塾長で、俳優の中本賢さん(53)は、期待を込めて話した。

中心の展示は、開館90年の名和昆虫博物館（岐阜市）が収蔵する標本類。世界有数の幅広さを誇る貴重な標本を間近に観察できる。また、かぶとの飾りにカマキリをあしらった江戸末期の甲冑（江戸東京博物館蔵）＝写真＝などの歴史資料も展示。古来から日本人の生活がどのように虫とかかわってきたかについても検証する。さまざまな映像も交え、楽しく、ためになる昆虫博にご期待を。



## 虫を知ると日本が分かる

大昆虫博

2019.1.15 読

「虫を知ると日本が分かる」をテーマに特別展「大昆虫博」が6月22日から9月5日まで東京・両国の江戸東京博物館で開かれる。解剖学者で、無類の虫好きとして知られる養老孟司さんらが監修にあたり、これまでにない視点の展覧会を目指す。

ART+  
プラス

## 夏の昆虫 怖いほどリアル

09.8.17 読売(夕)

樹液に集まる夏の昆虫たちが、怖いほどリアルな水彩画に描かれている。13日に98歳で急逝した作者の熊田千佳慕は、戦前に対外宣伝グラフ誌「NIPPON」のレイアウトを手がけ、戦後は絵本作家として活動。50代後半から『ファール昆虫記』の絵本化を始め、ポーロニャ国際絵本原画展などで注目された。



熊田千佳慕「森のジュースに集まる虫たち」

昆虫や草花をそれと同じ高さ、さらにはもっと下から仰ぎ見ている。敬愛するファールと同じく、時には地面に腹ばいになって観察し、家に帰って何枚もスケッチを描き、絵筆の毛先だけで何か月、何年もかけて仕上げたのだという。

子供の頃、時間を忘れて小さな生き

物を見つめたことを思い出す。今も背を低くして見回せば、世界はこんなにも広く、奥深いだろうか。『みつばちマーヤの冒険』などの絵本原画、動物画も含め約200点による「プチファール・熊田千佳慕展」は24日まで、東京・銀座の松屋銀座。(清)

モンシロチョウ



一分間の黙禱。あの沈黙の一分間は長いか短い。人生の時間の中では、ほんのつかの間すぎないが、さまざまな思いの詰まった濃密な時間でもある。その緊張を破るかのように目の前を過ぎる無邪気な蝶。ふっと空気が流れはじめ。

四季

長谷川 權

読売

2009. 8. 25

一分の沈黙そして秋の蝶

小枝恵美子

ピアノを軽やかに奏でるかのような一句。たしかに常識の世界では人間は蝶よりも重い。しかし、俳句の世界では蝶も人間も対等。蝶も人間のようなものであり、人間も蝶のようなものである。この句の軽やかさはそうした心の軽やかさ。

2009. 4. 7

四季 長谷川 權



東京・足立区生物園で

読売

蝶に会ひ人に会ひ又蝶に会ふ

深見けんじ